

◆【海員随想】 同級生① 及川帆彦

**私が船員になったのは、小学校のときの同級生と再会したのがきっかけであった**

戦争の末期、私は予科練を志願して中学を中退、青森県の三沢海軍航空隊に入隊した。が、半年足らずで終戦になり、故郷の仙台に帰った。7月10日の空襲で仙台の中心部は焼け野原になっていたが、私が住んでいた北部の方は焼けずに残っていた。

当時、中学を中退して軍隊に行った者は、無条件で元の中学に復学できることになっていたが、兄弟が多かったわが家の経済状態は、私を中学に通わせるだけの余裕がなくなっていたし、私自身、勉強する気持ちを失っていた。

そこで、郊外の農家の、伯母の家へ行って農作業の手伝いをするようになった。

そうして2年近い月日が経った。農作業そのものは嫌いではなかったのですが、そのまま百姓になることも考えたが、都会育ちの私には、農村の気風といったものに違和感があって、なじめなかった。7つ年上の兄は大工をやっていたので、大工になることも考えたが、兄と違って不器用であったから、やはり気が進まなかった。当時景気がよかった炭鉱へ行って働くことを考えたりもした。

とにかく、どんな仕事に就いたらよいか、大いに迷っていた。戦後の混乱期で、世の中がどうなるのか、分からないときでもあった。

戦後2年目の夏、焼け跡にバラックが建ち始めた仙台の街の中で、小学校のときの同級生であった高橋に、ばったり出会った。

同級生といっても家も離れていたし、特に親しかったわけでもないが、久しぶりに会えばやはり懐かしかった。

「しばらくだなあ」

「ほんとにしばらくだ。何年になるかな」

進んだ中学も別だったので、卒業以来、ほとんど会うこともなかったのだ。

私は海軍の作業服を着ていたが、小柄な高橋は水色の背広を着ていた。

「背広なんか着て、景気がよさそうじゃないか。何をやっているんだい？」

「俺か？ 俺は船に乗っているんだ」

「船に？」

「そう、船乗りだよ」

「ほう」

「海員だより」